



CLINICALPATH NEWS

Japanese Society for Clinical Pathway
日本クリニカルパス学会

No.
25

発行日
2011年3月25日

in 愛媛

第11回日本クリニカルパス学会 学術集会を開催して

2010.12.3～4

四国がんセンター 外来部長 河村 進



第11回日本クリニカルパス学会学術集会へ、多くの学会員の方々の参加をいただき大変感謝しています。おかげさまで盛会裏に学術集会を終えることができました。心からお礼を申し上げます。

学術集会は「変革－さらなる良質医療を求めて－」をテーマに愛媛県松

山市で12月3日（金）4日（土）の2日間にわたり開催しました。クリニカルパス学会は11年目をむかえ、導入当初からパス推進に関わってきた関係者も世代交代が必要となり、パスも進化して新世代のクリニカルパスへと変化しています。テーマに沿った企画とがん関連企画を多く取り入れました。会場はメイン会場を愛媛県県民文化会館（ひめぎんホール）、サブ会場を身体障害者福祉センターと愛媛看護研修センターの計3施設、15会場で活発な討議がなされました。

愛媛県県民文化会館別館では参加者の皆様にくつろいで



いただけるように、蛇口からポンジュース（都市伝説）のドリンクサービス、じゃこ天の無料試食コーナーのほか、リラクゼーション企画を多数準備して参加者の皆様の休息の場を設けました。またマドンナと坊ちゃんの衣装を着て写真撮影ができるコーナーも設営して好評を得ました。受付と各会場では小説「坊ちゃん」に登場するマドンナと坊ちゃんの衣装の職員が案内役をさせていただきました。

一般演題が524演題、シンポジウム4題、パネルディスカッション6題、教育講演5題、特別講演1題、特別企画4題、論文の書き方セミナー、教育セミナー、市民公開講座と盛りだくさんの企画を無事終了することができました。学術集会への参加人数は事前参加登録1,712人、当日参加664人計2,376人でした。

あいにく初日は雨嵐となり、発表、座長の先生方やランチョンセミナー用の弁当の到着が遅れたりしましたが、こ

▶ 第11回日本クリニカルパス学会学術集会を開催して
日本クリニカルパス学会第11回学術集会賞最優秀賞によせて
リレーエッセイ第19回

のトラブルも職員の懸命の対応で大きな混乱もなく無事終了することができました。また代理座長の急なお願いをこころよく引き受けてくださった先生方に紙面をかりてお礼を申し上げます。



懇親会では学会会員メンバーによるバンド演奏をお願いして、楽しいひと時を演出していただきました。会員の皆様のご協力が無事会を終了できたことを感謝いたします。



● ● ● ● ●

in 愛媛

日本クリニカルパス学会 第11回学術集会賞 最優秀賞によせて

2010.12.3～4

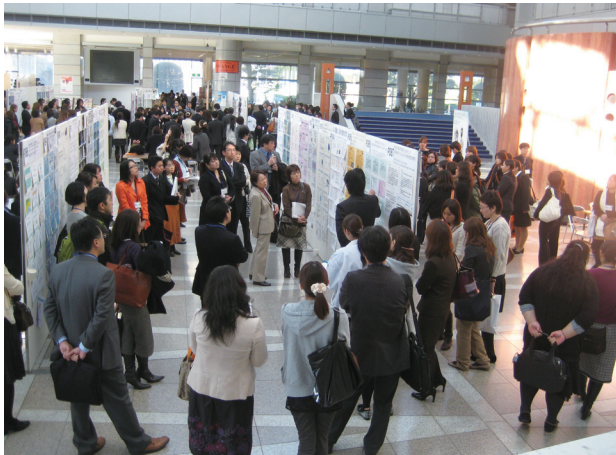
岩手県立大船渡病院 小児科 大津 修

去る12月に愛媛県松山市で開催された第11回日本クリニカルパス学会学術集会で、当院の4階東病棟（小児科・産婦人科病棟）の熊谷看護師が発表した「新生児状態適応型パスシステムにおける新生児導入パスの有用性」のデジタルポスターが学術集会賞最優秀賞を受賞しました。関係者を代表して私が受賞によせる手記を書かせていただきます。

そもそも、パス学会で小児科分野は超マイナー領域で、

しかも“病児”新生児ネタなどは、ほとんど珍発表扱いというほどクリニカルパスに馴染まない世界です。それは病児新生児の管理上、体重や在胎週数、診断、病状程度などが個々に較差があり過ぎるため、標準的な設定が困難、すなわちバリエーション出まくり、逸脱しまくりが予測されるからです。実際に正攻法のパスで悲しい結末になってしまい諦めてしまった施設も数あることでしょう。でも、一方で産婦人科の正常分娩はほぼパス管理が普及しきっており、それに付随して“正常”新生児は結構上手にパス管理されているのも事実です。これらは発表の“背景”とか“はじめに”とかで毎回のように御挨拶のように述べてきたことです。多くの病児もやがて正常児になるのを考えれば、「どうにかなるはず」と思案していたところへ、5年程前に「患者状態適応型パス」なるものに出会い、いきなり視野が開けた感じになりました。徐々に、段階的に、試作品を採用し改訂し…。やっと2年前に当院オリジナル「新生児状態適応型パスシステム」が完成し、第9回学術集会（大宮）で「概要編」「実施編」の2演題にまたがり新生児状態適応型パスシステムについて口演発表しました。実は、会場の反響は今回よりもこのときの方が大きく感じました。多数の先生方に賛辞（世辞？）、激励の入り混じったコメントをいただいたのを覚えています。今回はその後の2年間の成果発表だったわけですが、実は演題登録の時点で「いい線いくのでは」と根拠のない自信がありました。要するに珍しい内容なので目立つだろうと考えたわけです。実際にノミネートされてしまい、ちょっとウキウキで学会に馳せ参じました。が…。当日、会場で他施設の洗練されたポスターの数々を見た途端、自信は萎えてしまいました。レセプション会場では「表彰式に参加できただけ御の字。でもできれば5番以内（優秀賞）に。」などと念じておりました。結果は1番（最優秀賞）で、なんと有難いやら嬉し





いやらで関係者一同興奮状態とあいなりました。

しかし、肝心なのはこれからです。私たちの発表は「システム論」であって、現状のパスの細部内容は賞とはかけ離れるほど未熟です。また、当院は1年後に電カル化の予定ですが、既存のプログラムでは複雑な内容のパスほど電パス化困難で、なんだか前途多難です。それでも、今回の私たちの受賞で、少しは「病児新生児ネタ」が市民権を得て、やってみる施設が増え、発表する演題も多数になり、ディスカッションが盛んになることを切に切に望む次第です。

【日本クリニカルパス学会 第11回学術集会賞 受賞者】

最優秀賞：

岩手県立大船渡病院

熊谷真由美

優秀賞：

黒部市民病院

木下香寿美

医療経済研究機構

福田治久

富山県立中央病院

吉川知子

恩賜財団済生会新潟第二病院

大塚 歩

関西医科大学

山木 壮

入賞：

神戸市立医療センター中央市民病院

岸本健治

(財)田附興風会医学研究所北野病院

米本智美

市立札幌病院

表 亮介

JA長野厚生連佐久総合病院

飯島実和子

群馬県医師会温泉研究所附属沢渡病院

新田剛也

総合病院国保旭中央病院

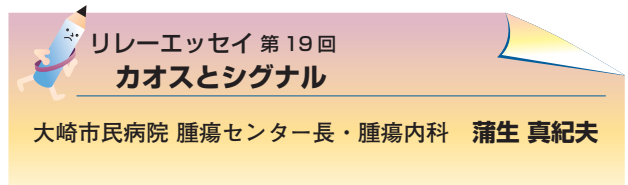
小林康祐

青森県立中央病院

福士真奈美

関西医科大学

由井倫太郎

リレーエッセイ 第19回
カオスとシグナル

大崎市民病院 腫瘍センター長・腫瘍内科 蒲生 真紀夫

世の中一寸先はわからないもので、ニュージーランドの惨事も、中東の混乱も、日本の国の姿のあやふやさも世紀末の様相に見えます。ただ、あきらめて止まるわけにもいけませんし、古今東西、さまざまな予測不能な因子にさえざられながらも前に進むこと自体が世の中を生きていくということの定義なのでしょう。医療の世界も標準パスの薄皮一つ裏では、いつもカオスと向き合っているわけですが、いろいろ悩むときりがないところで、最近はふつうにいけるところはふつうにマネジメントしようということだけをシンプルに考えています。

話は私の専門領域になりますが、がん治療の世界ではここ最近、「分子標的薬」が大変な勢いで開発されています。関連職種の方々にはおなじみのアバスタチンとかイレッサとかハーセプチンとかいう類の薬です。効果や副作用が特別であることや、とてつもなく高価な薬であるという実際的な話はさておき、これらは細胞が生きていることと本質的にかかわるという意味で興味深い薬です。私たちの細胞では遺伝子の設計図に書き込まれたさまざまなタンパク質がある種の関係性を保ちながら、うまく生きるための信号を調節しています。これはシグナル伝達系とよばれていますが、電子カルテのネットワークみたいですね。そんなにうまく動く電子カルテはどこにもありませんが、ともかくいろんな因子の関係性が重要ということで、細胞を病院組織にたとえれば、いろんな部署でさまざまな個人がそれぞれの役割を果たしていることで、はじめて全体がうまく機能するということです。この遺伝子たちのどこかに異常が起こって、細胞の生死に関わる関係性が大きく乱れることが、「がん」の発生や進展に関わります。会社や組織でも、ある個人が著しくおかしい動きをすると全体の機能に支障が出てしまい、あいつが「がん」なんだよ、などといわれてしまいますね。分子標的薬というのは、いうなれば、がんに関わるこれらの異常なシグナルの乱れを正常な流れに戻そう



蒲生真紀夫 先生

という発想の薬ともいえます。つまりこれらの薬の開発や臨床応用は、細胞が生きている仕組みを解明する研究とその理解の中から生まれてくるのです。こうしてみると細胞生物学と医学の距離はかつてないくらい急速に狭まってきています。一方、日々の臨床現場に目を向ければ、医療の提供と患者の人生の選択は複雑に錯綜しており、単純な解決策が見つからないことがしばしばあります。そもそもカオスの縁でかろうじて保たれている秩序が生みの定義とすればそれが当たり前の姿かもしれません。がん医療（〇〇医療）の専門家、高度な医療技術提供者としてみて、その技術はいつも相対的なものです。変化していくさまざまな状況に（患者の病態であれ、医学・生物学の進歩であれ、社会のシステムであれ）にその都度、論理的にかつ誠実に対応していこうという意思と行動こそが私たちの専門性の最深地層なのだと思います。

さて、私事ですが、昨年の10月、足掛け11年勤務したみやぎ県南中核病院から、宮城県北にある大崎市民病院に異動しました。半年たってようやく周りの空気になじみつつ、腫瘍センターの新規立ち上げをしています。たまたま

時期が重なり、この4月に病院の電子カルテ・パスシステムの全面入れ替えを行うところにあつてしまいました。その準備作業を手伝いながら、9年前にも全く同じことをしていたデジャブに浸っているのですが、夜の書類作業がずいぶんつらくなったことに、月日の流れをしみじみ感じています。自分の仕事も時と場所と人々に偶然ぶつかり流れているのだと最近素直に思えますが、もう少しは細々とシグナルをつなぎたいと思います。パスの文脈でいうなら、数年後に移転新築するという今度の病院が、地域の包括的ながん医療が、どんなアウトカム（とバリエーション）を見せるのか、楽しみも不安もありますから。

リレーエッセーのバトンは名古屋大医学部・メディカルITセンターの吉田 茂先生にお渡します。もともと小児科医である吉田先生は、私と臨床分野は異なりますが、7年前に仙台で開かれたクリニカルパス学会でお会いして以来、医療情報システムや診療データベースの構築などで大変いろんなことを教えてもらっています。また、（パス学会の仲間はほとんどがそうですが）仕事を離れて、心置きなく飲み語り明かせる友人のひとりです。

事務局から



クリニカルパス教育セミナー テーマ：「わかる!できる!クリニカルパス～基本と実践～」

【大阪会場】

会期：2011年7月9日(土)13:00～17:15

会場：千里ライフサイエンスセンター ライフホール

【東京会場】

会期：2011年7月23日(土)13:00～17:15

会場：学術総合センター 一橋記念講堂

※参加事前申込:学会ホームページ(<http://www.jscp.gr.jp>)から
オンラインにて登録してください。

第12回 日本クリニカルパス学会学術集会

会期：2011年12月9日(金)10日(土)

会場：京王プラザホテル(新宿)

会長：福井次矢 (聖路加国際病院 院長)

テーマ：「これからのチーム医療」

プログラム：特別講演、教育講演、シンポジウム、パネルディスカッション、
一般講演、ランチョンセミナー、パス展示 など

※学術集会の詳細に関しては、

<http://www.jscp.gr.jp/meeting/index.html> をご覧ください。



CLINICAL PATHWAY NEWS
これからのチーム医療

第12回日本クリニカルパス学会学術集会
日時：2011年12月9日(金)、10日(土) 場所：京王プラザホテル(新宿)
会長：福井次矢(聖路加国際病院 院長)

連絡先：聖路加国際病院 事務局 小川 〒154-8560 東京都中央区新富町9-1 TEL.03-5560-7064(直通) FAX.03-5560-6000